

Emily Brontë の研究

—その信仰—

宮川下枝

先般『英文学研究』第9号（梅光女学院大学英米文学科発行）に於いて Emily の信仰を作品の中を探ってみたいと思ひ乍ら、その姉 Charlotte 及び同時代の女性作家 George Eliot の信仰との比較から始めようと思ううちに遂紙数がなくなってしまって、Emily のだけは残してしまっていた。すっかり路肩を滑り落ちてしまった車をもう一度路面に引きあげて、今回はゆっくりと本論について考察しなければならない。

だがこれは『嵐ヶ丘』の注訳をお書きになった、豊田実博士もその序文に於いて、「一体エミリーの宗教思想がどんなものであったかを、彼女の書いたものから明かに知ることは困難である」⁽¹⁾と述べられているように、私にもむずかしい論題であった。早くから考え考え一年延ばしにして今日に到ってしまった。

“Emily Brontë remained virtually silent in public on the question of religion.”⁽²⁾

（彼女は自分の宗教観については口をつぐんで語らなかった。）

と言われているが確かに博士の言われる通り、「Emily は一個の mystic」⁽³⁾であり、「彼女の宗教は一つの体験であって、これを条理的に徹底して考えたことは恐らく Emily 自身にもなかったかも知れぬ」⁽⁴⁾の通りかも知れぬ。だが、

“Emily had a head for logic and a capability of argument unusual in a man and rare indeed in a woman.”⁽⁵⁾

（男性にしても異常な程の、又女性には全く稀にしか見受けられない程の、論理的な頭脳を持っていた）と言われる Emily が考え抜いたことは何であったであろうか。彼女の詩を読んでいけば彼女は神の問題について

は若い時から考え抜いたのだと推察せざるを得ないのである。人の依って立つべき根源について、生命について、彼女は考え通した人間であった。「エミリーは一個の mystic」の言葉通り彼女の考えた神は特殊の神であるかも知れない。私も、第4号に於いて「エミリーはキリスト教の信仰を持って居たとはいわれていない。彼女のもつ信念は、彼女独自のもので、より神秘的な境地のものであった」と書いた。確かに天の恵みが自分の救いにはならないと考えるあたり、

“I was only going to say that heaven did not seem to my home, and I broke my heart with weeping to come back to earth”; (Wuthering Heights Chapt. VI)

(私には、天国は私の家とは思われなかったといたいよ。そして、地上に帰りたいと胸の裂ける程泣いたわ)、と『嵐ヶ丘』の中でキャサリンがネリーに述べる言葉通り、変ってはいるが、「牧師の家庭に育ったが故に、彼女の思想の根底にはキリスト教精神と一致する数多くのものを認めずにはいられない」と4号に続けて書いている通り、これは私の早くからの意見である。厳しい家庭の宗教的躰に反撥を示し乍らも、彼女の根底には、幼い時から植えつけられた宗教的理解は彼女から離れ去ることはなかった。

“Then I go to prove if God, at least, be ture. (Wuthering Heights Chapt. IX.)

(少くとも、神が真実であることを証明したい)。

このネリーの言葉こそは、エミリーの真意を伝えるものではなからうか。私の考えを勇気づけてくれるのは、John Herwish の言葉又姉 Charlotte のちぎちぎの言葉である。二人の言葉を引用してみよう。

“Nevertheless the Christian cosmos continually shapes the thought of the poems.⁽⁶⁾

(にも拘らずキリスト教信念は詩の思想を常に形成している)。

“I have said that she was religious, and it was by learning on those Christian doctrines in which she firmly believed, that she found support through her most painful journey.”⁽⁷⁾

（最も苦難に満ちた、人生の旅路に於いて支えを見出すことの出来たのは、エミリーが深く信じていた、キリスト教教義を学んでいたからである。彼女は信仰深かった）

「英国北部、Yorkshire の Haworth という片田舎に、牧師の娘として育ち、日々を牧師館の中に過し、教会墓地を眺め乍ら成長した Brontë 姉妹が、何等かの意味で宗教の影響を受けるのは当然のことであり、又当時は社会的にも英国国教の確立していた19世紀のことである。そして彼女は伝統的な英国国教会に属していた」。

Emily Brontë's preoccupation with death is absolutely fundamental to her artistic character. It may have originated in Evangelicalism,⁽⁸⁾

と John Herwish の述べている通りである。

- では彼女の
- ①宗教への反撥
 - ②更にその根底に横わる宗教的理解
 - ③彼女自身の中に潜在する予盾観
 - ④彼女の到達した神の信念

そう云った順序で以下考えてみたいと思う。

I 反 撥

これは “a Calvinist atmosphere of the Clergy Daughter's School.” とも述べている通り牧師の娘達の集められた学校での厳しい掟に反抗するものである。

“The walk over the hill on Sunday to Mr. Wilson's Church at Tunstall was in winter an agony; snow slopped into girls' shoes and their gloveless hands froze; they remained in the unwarmed church, with wet feet all day.”⁽⁹⁾

（Tunstall にあるウイルソン氏の教会へ、冬の日曜毎に丘を超えて行くことは苦痛であった。雪は少女達の靴には入りこむし、彼女等の手袋もはめぬ手は凍りそうで、而も教会では一日中足を濡したまま冷い教会堂内に居なければならなかった。）

さて小説の中ではどのように扱われているであろうか。

“An awful Sunday,” “commenced the paragraph beneath. “I wish my father were back again. Hindley is a detestable substitute—his conduct to Heathcliff is atrocious—H. and I are going to rebel—” (Wuthering Heights Chapt. III)

(「ひどい日曜日」と下のパラグラフは始っている。「お父さんが早く帰っていらっしやればよいのに、ヒンドレーは本当に嫌なお父さん代りだ。兄のヒースクリフに対する仕打ちはひどいものだ。ヒースクリフと私は反逆をおこそうとしている。)長々と続く Joseph の説教に反撥し、ぬくぬくと暖い暖炉の前で楽しんでいるヒンドレー夫婦に憎しみを感じている。

“A vain idea! The service lasted precisely three hours.” (Chapt. III)

(何と礼拝は長々ときっかり三時間も続いた)。

b) “We thought we would just go and see whether the Lintons passed their Sunday evenings standing shivering in corners, while their father and mother eating and drinking, singing and laughing and burning their eyes before the fire.” (Chapt. VI)

キャサリンとヒースクリフが野道を駈け出して Thrushcross Grange に行ったのも、(あそこでも矢張り、日曜日の夜は大人は、暖炉の火であたたまり、眼はトロトロと赤くなりお酒を飲んだり歌ったり楽しんでいるのに、子供達は隅っこで震え乍ら過しているのかどうか見たかった)だとヒースクリフはネリーに答えているが、これも宗教的躰というよりも、表面的なものだけえの反撥であろう。

“Do you think they do? Or reading sermons, and being catechised by their men-servants, and to learn a column of Scripture names, if they don't answer properly?” (ibid)

(奴等は隅っこで震えていたと思う? 又は下男に説教を読みきかせられたり、宗教問答を覚えさせられたりしていたと思う? 又ちゃんと答えないと聖書の人物の名を覚えさせられたりしていたと思う)。と言っているように幼い折の強制された訓練は余程嫌なものだったのであろう。

又別の場面での反感は、ネリーが偽善的な下男ジョセフを非難するあたりにも、この反抗はうかがえる。時はクリスマス前夜、Earnshaw 家には、

Edgar Linton 兄妹も招待されることになっている。音楽隊も来ることになっている。客間では華やかな舞踏会が行われる筈である。

“I prepared to sit down and muse myself by singing carols, all alone; regardless of Joseph’s affirmation that he considered the merry tunes I chose as next door to songs. He had retired to private prayer in his chair!”
(Chapt.VII)

ネリーが一人、クリスマスの準備にあれこれと忙しく働き廻り、準備万端整って、やれやれと、ホッと一息椅子に腰を下ろし、満足気にキャロルを一人歌う時の様子であるが、ジョセフはそんな朗らかな調子の歌は似つかわしくないと行って、一人さっさと祈る為、自分の部屋に入ってしまう。その独善的態度を非難する気持がうかがえる。

これ等は、皮相的な虚偽的な信仰態度に対する痛烈な批判とみてよいであらう。

だがエミリーの中には、こうした反撥だけではなく、深い信仰的態度がうかがえることは否めない処で、このことは既に述べた通りである。

この態度は、作品の中に色々の形をとって現れているのでそれを考えてみたい。

II 信仰を基盤とする態度

その一つの現れが、罪に対する彼女の考え方ではなからうか。人間の evil の問題は英文学史上、長い間取り組んで来た問題であって、エミリーも矢張りその例に洩れず、人間の悪を十二分に追究した。そしてその悪を彼女が如何に扱ったか、これはいろいろに解釈されている処であり、

“I wish to be as God made me.”

(神がおつくりになったままの自分でありたい)。

の彼女の言葉などから、エミリーは善も悪もあるがままに受け入れて、自分の批判は加えていないのであると解する人もある。Herwish も

“an inner voice reminded me that the creature should not judge the creator.”

とエミリーの若い時の作文 “The Butterfly”

を引用して、この論を推しすすめている。だが「嵐ヶ丘」を読む時、エミリーこそは人間の邪悪さを罪として考へ抜いた作家として類別したいのである。アーンショー氏は、ヒースクリフをリバプールから連れ帰った時、これは A gift of God 神から賜ったものであると家族に紹介する。確かにこの言葉の中にはエミリーが人間の自然のままの姿を肯定しようとする姿勢がうかがえると思う。だがヒースクリフのなす数々の邪悪はエミリーの詩、又その批評、

Darling enthusiast, holy child.
Too good for his world's warring wild:
Too heavenly now, but doomed to be
Hell-like in heart and misery.

“Obviously the idea of a harmless and innocent child growing up to become involved in cruelty and crime was occupying Emily's mind.”⁽¹⁾

(罪もない無垢な子供が、人間の残忍さ、罪にやがてまきこまれてしまうとの考えが、エミリーの心を占めていた)。
の中にも明瞭に現れている如く、この神より造られた人間が、数々の邪悪をなすことへのいぶかり（これは彼女の若い頃の作文にも見受けられる通り）何故人間はかくも墮落をしなければならないのだろうかとのいぶかりとなる。彼女はこんなことで長い間苦しんでいることは詩を見ても明らかである。そしてこの邪悪を罪として捉えている。これは総べてネリーの言葉として表明されていると思うのである。そしてその罪は罰せられなければならないもの。その罰せられる前に悔い改めなければならないと述べている。

“All sinners would be miserable in heaven” (Chapt. IX)

「罪人は総べて天国では惨めですわ」とネリーはキャサリンに云う。

数々の復讐を続け完成えあと一息という処迄達したヒースクリフにネリーはさすとす。罪の悔改めの必要性である。

“You’ll be spared to repent of your many injustices, yet! I never expected that your nerves would be disordered; they are, at present, marvellously so, however, and almost entirely through your own fault.”

“You are aware, Mr. Heathcliff,” I said, “that from the time you were thirteen years old, you have lived a selfish, unchristian life, and probably hardly had a Bible in your hands during all that time; how very far you have erred from its precepts, and how unfit you will be for its heaven, unless a change takes place before you die?” (Chapt. XXXIV)

(御自分でもよくお分りでいらっしゃいましょう。ヒースクリフさん。十三才の時から、あなたがわがまま勝手なキリスト教徒らしくない生活を送ってこられたことは、恐らくその間に聖書を手にされたことは一度もございますまい。聖書の教えからあなたがどんなに遠ざかってしまわれたか。死ぬ前に悔い改めでもなさらない限り聖書の説く天国えはとても入れて貰えないのですよ。)

話の筋から言えば逆になってしまうが、まだヒースクリフの少年時代、この復讐はきつとしてやるからとヒンドリーに対して彼が悪意に燃えた時、これもネリーが彼にさとしている。

“It is for God to punish wicked people; we should learn to forgive.”
(Chapt. VII)

(よこしまな人間は神さまが罰して下さいます。私共は許すことを学ばねば)

“No God won’t have the satisfaction that I shall.” (ibid)

(いや、神さまには復讐する人間の満足は味えないよ)。とヒースクリフは反論するが、この二人の声はよく私が述べているように復讐してはならないという人間の中の一つの声と、いや、どうしても復讐してやろうというもう一つの声であろう。とまれこの罪の人間を裁くのは神であって人間は許さねばならないとのエミリーの思想がはっきり読み取れる箇所である。

もう一つの現れは愛であろう。

これはヒースクリフとキャサリンの愛というようなものでなく人間の行

為、思想の根本、奥深くに見られるものの中に愛の精神が現れているというのである。ではどのような形となってこの愛の精神が具現されているかを見てみたい。そしてそれ等は聖書コリント前書十三章“愛の章”の一つ一つの愛の定義の裏がえしではないかと私には思われるのである。

(1) “愛は畏れず”¹²⁾

‘It’s odd what a savage feeling I have to anything that seems afraid of me.’

ヒースクリフは自分をおそれているように見える者に対しては狂暴な感情が湧いて来るのは自分乍ら分らない程のものだ。愛は畏れずの裏をいく言葉ではなかろうか。ここにこの復讐に燃える野性的な男を恐れない少女が現れた。キャシイである。‘I’m not afraid of you.’ (私あんたなんかこわくないわ)、とヒースクリフに彼女は平気で毒づく、何物をも恐れぬエミリーがよく出ている。自分をおそれぬ人間が現れたということは彼には驚きであった。この言葉を機にして彼は復讐を止める心理過程に入っていくのではないかと私には考えられるのである。

(2) 愛は非礼を行わず¹³⁾

聖書の説く非礼という言葉がどういうことを意味するのであるかもっと調べてみなければ分らないが、他人の悲しみを共に悲しみ、人のよろこびを共によろこぶこれが礼ではなかろうかと私は思うのである。

And I want some living creature to keep me company in my happiness!
(Chapt. X)

(私の幸福を分ってくれる生きた人間が相手に欲しいのよ) ヒースクリフの出現を喜ぶキヤサリンはもう既にエドガー夫人になっていて勿論夫エドガーは妻の昔の恋人の戻って来たことを喜びはしない。だが三年間行方知れずに出て行ったヒースクリフの突然の訪問は如何に彼女を有頂点にしたかは、その夜の彼女のはしゃぎ方にもよく出ている。人の喜びを本当に共に喜んでくれるのは血の通った生きた人間であるとの考え方はこれもエミリーの考えるところであろう。なかなか面白い。

(3) 愛は寛容にして慈悲あり¹⁴⁾

“Wash and learn to smooth away the surly wrinkles, to raise your lids frankly, and change the fiends to confident innocent angels, suspecting and doubting nothing, and always seeing friends where they are not sure of foes.” (chapt. VII)

ネリーの口を通して語られている Heathcliff への忠告であるが、(眉の間のしわをのばしてしかめつらを止めて、率直に眼を開けて見なさい。友を敵だと思っては黙目よ。信頼の出来る邪気のない友だと思いなさい。疑ったりかんぐったりしてはならない。敵だということがはっきりしない時に敵だなどと思っははいけませんよ、友情を見出しなさい) と教えるあたり如何にも慈愛にとんだ教えであって、深い寛容の精神に基くものであると思うのである。

(4) 愛は嬌らず誇らず¹⁵⁾

“You had the reason of going to bed with a proud heart and an empty stomach.” “Proud people breed sad sorrows for themselves.” “But if you be ashamed of your touchiness, you must ask pardon; ...only do it heartily.”

これもネリーがヒースクリフえキャサリンえの愛を取り戻させようとじゅんじゅんとさとす処であって、

(傲慢な心でいれば御飯をも食べられずお腹は空いたまま寝なければならぬでしょ。傲慢な人は自分で自分に悲しみをもたらすのよ。でも自分の短気が恥しかったら謙遜な気持になって詫びにいらっしやい。でも真心こめてしなければ駄目ですよ)

スラッシュクロスから急に美しくなり、意気揚々として帰って来たキャサリンを見て、しりごみするヒースクリフえの何と暖い励しの言葉であろう。私はどうしてもこうした言葉の中に愛の姿を見出さずにはいられないのである。

“Poor wretch! I thought. ‘you have a heart and nerves the same as your brother men! Why should you be anxious to conceal them? Your pride cannot blind God! You tempt him to wring them, till he forces a

cry of humiliation. (chapt. XXXIII)

(可哀そうな人、外の人と変らぬおもいやりも神経もあるのに。何故それをひた隠しにしようとするのでしょうか。そのごうまんさも神をあざむくことは出来ないのですよ)

傲慢であると神を見ることが出来ないのだ。謙遜なもののみが神を見ることが出来るのである。

エミリーの到達した神

ではエミリーの神は一体どのような神であろうか。

“She created for herself in the visible world an invisible one.

(彼女はこの見える世界の中に見えざる世界を自分でつくり出していった)。と Herwish は評し、

“Oh! God within my breast

なる彼女の詩の一節 (エミリー、ブロンテの詩)

Catherine Earnshaw, it's my own world. my spirit's home that heals my agony. (Wutheing Height Chapt. XVI)

Herwish の評、エミリーの詩の一部、又嵐ヶ丘の中のキャサリの死を直前に控えてのヒースクリフの絶叫などから推察すれば確かにエミリーの神は彼女独特の神と考えるべきであろう。だが唯魂の苦悩にのみ明け暮れた若い時代、天国と自分とは何もかわりも持たない過程を経て、遂に天の神は自分の魂を苦悩より解放してくれる霊の抛るべき処として彼女に密接な係り合いとなり、霊の救いとなってくれる迄の段回は、彼女の詩を通して追うことが出来る。では彼女が若い頃より秘かに書きためていた詩を繙いて彼女の到達した段回を追いついてみたい。詩を通じて彼女が如何に若い二十代の始めからこの世の苦悩に心痛し人間性に苦しみ神の存在を考え大なるものへの憧れに燃えていたかが分るのである。

(1) 悩み

I see around me tombstone grey

灰色の墓石なる有名な詩に於いて

For Time and Death and Mortal pain
Give wounds that will not heal again.
(The Poems of Emily Brontë) 1841 7.17)

(詩集 p.167)

時、死、そして人間の苦しみは
再び癒すことの出来ぬ傷をつける。

What tenants haunt each mortal cell
What gloomy guests we hold within
Torments and madness, tears and sin!

(詩集 p.167)

この一人々々の心に入入りするもの

我々の心に迎え入れる客の何と憂鬱なことよ。

苦悩、狂気、涙、罪である。

と欺いている。こうした数限りない苦悩の詩の後に、大いなるものへの
憧れが到来する。

(2) 大いなるものへの憧れ

Thy mind is ever moving
In regions dark to thee
Recall its useless roving
Come back and dwell with me.

Yes, I could swear that glorious wind
Has swept that world aside,
Has dashed its memory from thy mind
Like foam-bells from the tide

お前の心は暗い処から絶えずさまよい続けている
その無益なさまよいは止め
私の処へ戻って一緒に住みなさい。

はい分りました。あの輝しい風が
この世の(悩)を吹き払ってくれました
大海原の泡のように、
その記憶も拭ってくれました。

更にその大なるものは自分と無関係のものではなくって西風にのって自分の解放にやって来てくれるとの希望に変わる。

(3) 大なるものの発見

He comes with western winds

彼は西風に乗ってやって来る。

閉じこめられた魂にやって来る自由、救い。自分でも救は何かよく分らないけど肉体の悩みから離れ魂が自由になる時が来るとの希望を持っている。自由をもたらししてくれる使者、魂を解き放してくれる使者として彼を迎えている。

Then dawns the Invisible, the Unseen its truth reveals,

My outward sense is gone, my inward essence feels.

Its wings are almost free, its home, its harbour found.

Measuring the gulf it stoops and dares the final bound!

目に見えぬ神があたりを明るくし

見えざる神がその真理を展開してくれる

私の外なるものは去り内なるものが感じる

その翼を自由に拡げ着くべき港を見出し

止るべき湾の大きさを目測し

最後の定着地を決めている。

そしてそれは更に自分の救いの確信となって次の詩に読みとれる。

(4) 大なるものへの確信

No coward soul is mine,

あの有名な詩の中から引用しておこう。自分の魂の問題に悩みに悩んだエミリーがこの詩に到っては明確な確信を得たことを信ずることが出来るのである。

I see Heaven's glories shine.

And Faith shines equal arming me from Fear.

私には天の栄光の輝きが見える

信仰も同じよう私を恐怖から守り輝いている。

O God within my breast.
Almighty ever present Deity.

おお私の胸のうちに宿る神よ
常に居給う全能の神よ

Though Earth and Moon were gone.
And suns and universes ceased to be.
And thou wert left alone.
Every existence would exist in thee.

(詩集 p.243)

たとえ、天地はまきさられ日も月も滅ぶとも汝があれば、すべての存在は汝のうちにあり

この詩はエミリーが死の数ヶ月前に書いたものであって、長い間の魂の遍歴のあと彼女の辿りついた確固たる信念をよみとることが出来るのである。永遠の生命を確信した実に力強い詩である。それはヒースクリフがネリーに喩されて少年時代は、No, God will not have the satisfaction that I shall. と(神さまにお任せしたのでは、僕が自分でやる得響の満足は味えないよ)と反対したのであるが後年に到って再びネリーに You have not read a Bible. (あなたは十三才の時から聖書も読んでいない)と教えられて“I am abliged to you.” ありがとうと静かに感謝するその彼の態度にも似て、エミリーも激しい反撥から神えの憧れ、自分とは無関係と主張し乍らもやがてはその力を信じすべてをゆだねようとするに至る。

On Monday, 18 December, 1848, Charlotte read to Emily from Emerson's essays, 'I read on till I found she was not listening.'¹⁰ Emily died a few hours afterward, after a short, hard conflict.'

(1848年12月18日月曜日、シャーロットはエミリーにエマソンのエッセイを読んでやった。彼女がもうきいていないということが分る迄読み続けてやった。その数時間後エミリーは、ほんの僅かの間大変苦しんだが死んだのである)。

とシャーロットは親友エレンナッシイえの手紙で綴っている。神えの repentance, 神えの return を示して、エミリーはその短い生涯を閉じるわ

けである。

最早彼女を待つものは、

“May she wake in torment!”

(苦しみ目覚める) のではない。

Then dawns the Invisible, the Unseen its truth reveals,

(神が見え 見えざるものが真理を明し給う。) である。

the orthodox family atmosphere may have had something to do with it,
but reserve was also her nature.¹⁸

正統派的な家庭の宗教的な雰囲気に関係あったのであろう。彼女は控え目でありあまり述べなかつたけど。と Herwish の言葉にはあるが、その控え目であったがエミリーがその長年の詩に於いて、又作品 *Wuthering Heights* に於いて極めて自由奔放にその思想をうたいあげ、その感情を述べて長い間の苦しみより徐々に脱却するあたりの成長を遂げたのであれば、実に見事な足なみである。死の直前迄姉にあのエマソンの self-reliance の論文を読んで貰っていたエミリーは天晴れである。人生の拠って立つべき根本問題と真向うから切り結び人に頼らず自分の力で神を見出して行ったのであるからその歩み振り生き様は賞讃に価するものである。

Norman Sherry

.....but is yet Christian and stoic. Courage, endurance and freedom are the most desired, and Emily's most moving expression of her belief in a brave independent soul which is part of God.....¹⁹

(彼女はキリスト教徒であり克己的である。彼女の最も欲するものは勇氣、忍耐、自由でありその勇敢な人に頼らぬ精神で信条を述べる感動的な表現は神を云い表わしている) と彼女を評している。

私もエミリーを書く度にその勇氣ある精神に鼓舞されるものであるが今回も例外なく再び彼女の崇高なる精神にまみえ、再び勇氣づけられて今回この小論を終るものであります。

註

- (1) 豊田 実 : *Wuthering Heights*. 序文 研究社
- (2) John Herwish: *Emily Brontë a Critical Biographical* p. 58. Macmillan.
- (3) 豊田 実 : *Wuthering Heights*. 序文 研究社
- (4) 同上
- (5) 註(2)に同じ p.43.
- (6) 同上
- (7) Charlotte Brontë: *Biographical Notice of Ellis and Actone Bell*.
- (8) Emily Brontë: *A Critical and Biographical Study* p.62.
- (9) Philis Bentley: *The Brontë and their World* p. 26 Thomas and Hudson.
- (10) 註(2)に同じ p. 66.
- (11) Alastair Everitt: *Emily Bronte an Anthology of Criticism* p.17 Frank Cass & Co.
- (12) 聖書 コリント前書 13章
- (14) 同上
- (15) 同上
- (16) 同上
- (17) 註(2)に同じ p.62.
- (18) 同上 p.105.
- (19) Norman Sherry: *Charlotte and Emily Brontë*. p.109 Evans.

Text:

Wuthering Heights (豊田実註) 研究社

The Complete Poems of Emily Jane Bronte (Hatfield) Columbia.